

遠藤は、電話番号案内サービスに電話をかけるため、受話器を上げた。

「はい、一〇四の上田です」

「もしもし、大阪市内の大阪インターナショナルホテルの電話番号をお願いします」

「かしこまりました。大阪インターナショナルホテルをご案内いたします。ありがとうございます」  
「ございました」

電話番号の案内が流れてくると、遠藤は素早くメモにとり、大阪インターナショナルホテルに電話した。

「はい、大阪インターナショナルホテルでございます」

「お忙しいところ恐れ入ります。宿泊料金についてお聞きしたいのですが」

「それではフロントにおつなぎいたしますので、お待ち下さいませ」

「お待たせいたしました。フロントでございます」

「少々お尋ねいたしますが、そちらのシングルとツインルームの宿泊料金を教えていただけますか？」

「はい。シングルが一万五千円、ツインが一万八千円でどちらも朝食付でございます」

「そうですか。ではシングルの予約をお願いします。明日、一月十日は空いてますか？」

「申し訳ございません。あいにく、明日はシングルが満室となっております。ツインでしたら一部屋お取りできますが」

遠藤は一瞬ためらったが、「ではツインでお願いします」と答えた。

「ありがとうございます。では、お泊まりになる方のお名前とお電話番号をどうぞ」

「はい、伊東印刷株式会社の朝倉一郎です。電話番号は〇四五―六二一―一七八―です」

「かしこまりました。では、伊東印刷株式会社の朝倉一郎様で、明日一月十日のご一泊でツインルームのご予約を承りました。私、フロントの緒形と申しますので」

「あ、私は、伊東印刷の遠藤と申します。それではよろしくお願いします」

受話器を置いて一息ついたとたん、遠藤のダイレクトインが鳴った。

「はい、伊東印刷の遠藤です」

「もしもし、朝倉ですけど」朝倉は遠藤と同じ課の先輩である。

「お疲れさまです。今、ちょうど朝倉さんの携帯に電話を入れようと思ってたんですよ」

「いいタイミングだな。で、明日の大阪出張の件だけど、ホテルの予約は済んだ？」

「はい、たった今。でもご希望のアーバンホテル大阪は満室で取れませんでした。その近辺でいろいろ探しましたがやっぱりほとんどが満室で、結局、大阪国際ホテルになりました。少し予算オーバーの一万八千円のツインですけどいいですか？」

「ああ、いいよ。ありがとう。アシスタントの明石さんがお休みだから、遠藤君に頼んでしまつて悪かったね。今度、一杯おごるよ。じゃあ、僕は今日はこのあと、青山の内田エレクトロン社を訪問してそのままあがるから」

「わかりました。では失礼します」

電話を切つて腕時計を見るともう四時半。遠藤はホテルの予約騒動で中断していた売上報告書の作成に慌てて取りかかり、キーボードの上で指を走らせた。